

コンスタンチン・リフシッツ バッハを語る

バッハは私の中心に どっしりと構えている作曲家。 いつの頃からか、 バッハは私の音楽の中にいました。

— 『平均律クラヴィア曲集』は、24すべての調性を
使い、全宇宙、神の秩序を表現した作品と言われます。
あなたはどのように感じになりますか？

リフシッツ
いろいろなとらえ方があります。私の場合、もう何年
もこの作品を弾いていますが、毎日が発見の繰り返しで、
返して、ここまで来ています。発見すること、
作品に対する私の見方、読み方が変化し、それは
もちろん、演奏にも表れます。これは、「不可解な隠れた
プロセス」なのです。

08年にアメリカで、『平均律』全曲を収録したDVD
が出ました。実はこの先、平均律をスタジオ録音

バッハの音楽世界を旅する。

世界中で絶大な評価を受けているリフシッツのバッハ演奏。2015年は壮大なスケールの『平均律クラヴィア曲集』第1巻、第2巻、そして晩年の境地『音楽の捧げ物』を3日間で演奏。バッハの音楽を宇宙として体験する、またとない機会です。

しようと計画しています。1日、2日、時間をかけて。おそらく、聞いてくださる方の方が、08年の演奏や解釈の違いを、より顕著に感じ取ってくださるのでは、より明確にそれを言葉で表現してくださるのではないのでしょうか。私自身が謎に感じる「不可解なプロセス」は、おそらく、解き明かす必要はないのだと、私は思っています。

初めて『平均律』を演奏会で弾いたのは、02年のことでした。その時は、第1巻のみ。2巻は、それから約2年後に弾きました。1巻の方は子供の時から弾いていましたから、慣れ親しんでいたのですが、2巻は1巻よりむずかしく、2年という「合間」を置いてから、ステージで弾きました。

以前に日本でも『平均律』を演奏いたしましたが、その時は1巻と2巻を混ぜ合わせ、ハ長調から、調性順に弾きました。多くの国で、これまでそうやって演奏してきました。日本、ヨーロッパ、アメリカでも。今回は違う形で演奏します。所沢で1巻全曲、そしてフィリアホールで2巻全曲。実は1巻2巻を混ぜてプログラムを構成する方が、より弾きやすいのですが、今回はあえて、その「より簡単な」道を避けて、演奏します。

『平均律』を弾くことは、私にとっては「休息」であり、「仕事」でもあります。この作品を演奏すると、なんとというか、「再生」できる感じがします。疲れた時に『平均律クラヴィア』を弾くと、それが精神的支えになり、エネルギーが戻ってくるのです。聴衆の皆さんにも、ぜひそのように感じていただきたいですね。

©Matt Anker / EMI CLASSICS

KONSTANTIN
LIFSCHITZ
X J.S. BACH

コンスタンチン・リフシッツ (ピアノ) 「J.S. バッハの宇宙」 [全3回シリーズ]

鍵盤音楽の旧約聖書 Vol.1 in 所沢

平均律クラヴィア曲集 第1巻

2015年2月7日 (土) 14:00

所沢市民文化センターミューズ マーキーホール

料金: 全席指定 ¥3,500

1回券: ミューズチケットカウンター 04-2998-7777

<http://www.muse-tokorozawa.or.jp/>

音楽の父、子息への愛&晩年の傑作 in 上野

インベンションとシンフォニア 音楽の捧げ物

2015年2月14日 (土) 14:00

東京文化会館 小ホール

料金: 全席指定 ¥6,500 / <夢倶楽部会員> ¥5,800

1回券: ジャパン・アーツぴあ 03-5774-3040

<http://www.japanarts.co.jp>

鍵盤音楽の旧約聖書 Vol.2 in 青葉台

平均律クラヴィア曲集 第2巻

2015年2月15日 (日) 14:00

青葉区民文化センター フィリアホール

料金: 全席指定 ¥4,500

1回券: フィリアホール チケットセンター 045-982-9999

<http://www.philiahall.com>

CD付3公演シリーズ券 ¥14,500 / (夢倶楽部会員 ミューズメンバーズ ¥13,500)

ジャパン・アーツぴあ (03) 5774-3040

ジャパン・アーツぴあコールセンターのみで受付 (バッハ「ゴルトベルク変奏曲」新録音CD付) ※各会場主催者受付にてCD引換券とお引き換えの上、CD1枚をお受け取り下さい。

主催: 所沢ミューズ、ジャパン・アーツ、フィリアホール

協力: キングインターナショナル

KONSTANTIN LIFSCHITZ

X J&S BACH

『平均律第1巻』は、息子フリーデマンのために書いた曲であり、『インベンシオンとシンフォニア』も、同様にフリーデマンのために作曲されたと言われています。父親としての思いが込められた作品なのですか。

リフシッツ

まさにその通りです。バッハは、数人の息子の中でも、特に秀でていると見込んでいた長男のヴィルヘルム・フリーデマンに、いろいろな音楽的要素を学ばせたかったのだと思います。『平均律』が書かれたとき、フリーデマンはまだ幼かったのですが、そう考えると驚きです。『インベンシオンとシンフォニア』は特にそうです。感情的に内容が詰まったこの作品を、大人でも演奏するのが困難なのに……。まるで、100キロもの重石を、息子に背負わせたような……（笑）。

でもフリーデマンはこれらの作品を演奏していたと言われています。すごいですね。バッハに一番望みをかけられていたフリーデマンは、結局アルコール中毒や貧困などに苦しみ、困難な人生を歩みました。でもバッハは、彼の才能を非常に高くかつていました。彼のために書かれた作品は、父バッハの高い評価の表れです。

『平均律』の第2巻は、1巻と比べて多様性が高まり、バロック式から古典派への傾向がみられます。1巻と2巻の違いを、どう感じますか？

リフシッツ

まず大きな違いは、第1巻は、集中的に書かれており、その点、より「まとまりのある」「統合的な」作品で、言ってみれば、一つの「居城」のような感じですが、それに對し、第2巻の方は、バッハの初期や晩年の作品が集められた、言ってみれば何年もかけて「寄せ集められた」作品です。ですから、第2巻には、バッハのみならず、たとえば次男で、宮廷でフリードリッヒ二世に仕え、のちハイドンらに大きな影響を与えた、カール・フィリップ・エマヌエル・バッハの、センチメンタルなスタイルも、垣間見ることが出来ます。また末の息子、ヨハン・クリスティアン・バッハ、彼は晩年ロンドンで活動していたことから、「ロンドンのバッハ」と呼ばれており、モーツァルトがロンドンを訪れた時に会い、のちモーツァルトは彼の影響を受けることになりました……。これは末っ子の作風も、この第2巻では聞こえてきます。これは

大きな家族アルバムのような作品と言えましょう。このアルバムは、19世紀、20世紀、そして現代にいたるまで、ずっと読みつがれてきたのです。2巻は、確かにより複雑。それは1巻のような「統一性」がない分、より難しいのです。

『24の調性を一度に弾く醍醐味は、何でしょうか？』

リフシッツ

そうですね、やはり、大変な努力を要することでしょうか。でもそれが、逆に私を“触発”する、というのか、“励まし”となり、気持ちをかき立ててくれます。精神的にも物理的にも、調性の完全性を、より面白い形で演奏会で、プログラムの中で表現できれば、と考えています。

『音楽の捧げ物』は晩年の作品ですが、様々な作品を通して、どのような境地に達したとお感じになりますか？

リフシッツ

とても高い、届かぬ境地に達しました。バッハの『フーガの技法』と比べて考えてみると、『フーガ』の方は、バッハらしい、短く簡潔なテーマが続きますが、『捧げ物』の方は、国王（大王）から与えられた主題で即興しています。ほかの作曲家ならあきらめたであろう課題を、バッハはチャレンジして、完璧な作品に仕上げました。『フーガの技法』に比べると、長さはぐっと

短いですが、内容的には非常に濃い、目が回るような多彩なテキストです。まるで日本語の漢字のよう。多彩で難解で……。特に最後の6声のリチェルカレは、音楽的にも技術的にも、希有な作品ですね。

今回のように、『平均律第1巻、2巻』、そして『音楽の捧げ物』などを一挙に演奏できる音楽家は他にいません。バッハはあなたにとって近しい作曲家だと思いますが、あなたにとってはそんな存在ですか？

リフシッツ

私を成長（向上）させてくれる存在です。もちろんバッハ以外にはほかの作曲家の作品も、多様的に演奏するよう心がけています。バッハだけを演奏しているわけではなく、私の名前をバッハオンリーとされることは避けたいと思います。でも、バッハは私を豊かにしてくれる。バッハの作品を弾くことで、ロマン派の作品、20世紀の作品、現代曲などの演奏が、豊かになっていく。逆も言えます。モーツァルト、ベートーベン、20世紀の作品などを演奏すること、それに指揮をすることがバッハの演奏に非常に良い作用を及ぼしていると思います。“伸びる”ことができる、と言いましょか……。

バッハは私の中で中心にどっしりと構えている作曲家。バッハの作品を演奏することができる幸せを感じながら、その時その時でできる限りの演奏を、続けていきたいと思っています。

私にとっても最初のバッハ作品……。ロシア人が最初に読んだプーシキンを読んでいないように、いつの頃からか、バッハは私の音楽の中にいました。でもよく覚えていることは、二長調の『プレリュード』、これは子供に課題としてよく練習させられるプレリュードですが、それを弾いたときのことはよく覚えています。5歳か6歳の時だったと記憶していますが、まるで明るい火花が散ったような、そんな感覚にとらわれました。音楽に火花、です。それはよく覚えています。

日本へ行くことを、楽しみにしています。私が愛する聴衆の皆さんとの再会に、今からワクワクしています。今回は、バッハの他に、モーツァルトの弾き振りと、室内楽の演奏も行います。すべての演奏会で、私が持っているものを、すべて皆さんにお伝えしたいと思っています。

2014年12月8日電話にて取材／文：小賀明子（ロシア語）



© Sona Andreyan